

国立極地研究所

南極・北極科学館

春の企画展示に ようこそ！

タロ、ジロ、たけし・・・南極オールドファンにはおなじみの名前かもしれませんが、人の名前ではありません。タロ、ジロはカラフト犬、たけしは三毛猫の名前です。彼らは、第1次南極地域観測隊とともに南極昭和基地に赴き、南極の冬を過ごしたツワモノなのです。

たけしはちょっと別格ですが、カラフト犬たちは決してペットとして南極に連れて行かれたわけではありません。犬ぞりを牽引する貴重な戦力としてでした。最初はなかなか思い通りに動いてくれなかった犬たちですが、そのうちチームワークを発揮して、何と昭和基地から200km以上も離れたボツヌーテンという山の調査旅行を成功させます。ただ、越冬を終えた犬たちを待っていたのは非情な運命でした。第2次隊の送り込みを断念せざるを得なくなった観測隊は、タロ、ジロを含む15頭のカラフト犬を残したまま昭和基地を離れたのです。そして翌年、第3次隊が生きていたタロとジロを発見した・・・というストーリーは奇跡の物語として今も語り継がれています。

一方のたけし。こちらも数奇な運命でした。第1次観測隊が東京港を出発する2日前、鈴木はなという動物愛護団体の女性が、「オスの三毛猫は航海に縁起がいい」という理由で持ち込んだのがたけしでした。その時は名前はなく、出航後に公募によって第1次隊の永田武隊長の名前をとってたけしと付けられたそうです。たけしはカラフト犬と違って荷役をするわけでもなく、おまけに寒がりとあって、もっぱら隊員のペットとして可愛がられます。第1次越冬隊とともに無事日本に帰国するのですが、引き取られた隊員の家から忽然と姿を消し、以後行方不明となってしまいました。

今回の企画展「南極猫たけしと仲間たち」は、これまでご好評をいただいた「南極観測隊と動物たち」の第3弾になります。萩原弘子氏作製のたけしのフェルト人形も展示に加わります。この人形、第61次隊とともに昭和基地に行ってきたので、たけしのつぶやきにも耳を傾けていただければ幸いです。